



THE FLYING DUTCHMAN.
The Flying Dutchman.

目次

巻頭コラム「いわき市立草野心平記念文学館 所蔵資料でたどる森鷗外、茉莉とのゆかり」渡邊芳一(いわき市立草野心平記念文学館 専門学芸員)／展示報告
 ／活動報告／展示のお知らせ 特別展「荷風生誕140年・没後60年記念 永井荷風と鷗外」展示会場から／カフェ便り／コラム「点から線へ、そして
 面へ」『森鷗外宛書簡集2(あーい)編』編集を終えて」須田喜代次(大妻女子大学教授 森鷗外記念会常任理事)／シヨップ便り／これからの催しもの／
 ボランティア活動ノート／2019年度後期 開館カレンダー／編集後記

表紙：永井荷風筆鷗外宛絵葉書(部分) 明治41年11月22日消印

いわき市立草野心平記念文学館

所蔵資料でたどる森鷗外、茉莉とのゆかり

渡邊芳一（いわき市立草野心平記念文学館 専門学芸員）

昭和34（1959）年4月18日、草野心平は宿醉のベッドで森鷗外の作品を読んでいた。翌月刊行予定の『森鷗外全集 第4巻』（筑摩書房）に付される「月報」の原稿を執筆するためである。

心平の日記によれば、その後、同24、26日にも作品を読み、同27日、「鷗外を詩にしぼり、書いているところ」に担当者から訪し、「少し待っててもらって四枚書きあげ」原稿を渡した。

その一文「鷗外の詩」で心平は、日露戦争時、リアリティのない従軍記事を報道した新聞に批判的だった鷗外の談話をきっかけに、『うた日記』に収録された詩「我馬痛めり」を引用して、「この詩のイメエジは実に鮮明」であり、「鷗外の詩は、どれも冷徹な客観の磁場でつくられている」と評している。また、「青春のエネルギーを要する詩を五十歳前後に書いたということ」が「鷗外文学の形大さ」を改めて暗示するかのようである」と結んだ。

心平は、明治36（1903）年、福島県石城郡上小川村（現いわき市小川町）に生まれた。幼い頃から腕白で、ひどく痴が強かった心平は、本を食いちぎり、鉛筆をかじり、誰かれとなく噛みついたといい、その幼少期を、生家の間近に聳える大花崗岩、二ツ箭山に喩え「ガギガギザラザラ」だったと描写している。

大正8（1919）年、県立磐城中学校（現磐城高等学校）を中退、上京した心平は、翌年、慶応義塾普通部に編入。さらに大正10年、中国、広東省広州の嶺南大学（現中山大学）に留学した。この時、16歳で夭折した長兄民平の遺品である3冊のノートを持参。そこに書かれていた詩や短歌に触発され、詩を作り始める。ちょうど鷗外が亡くなった大正11年頃である。あまりに盛んな詩作は、同級生から「Machine gun（機関銃）」と呼ばれる程で、留学時代、心平は青春を謳歌するとともに詩人としての第一歩を踏み出した。

大正12年、心平は亡兄との合本詩集『廃園の喇叭』を贈写

版印刷で発行し、大正14年、詩の同人誌『銅鑼』創刊に参加。同誌をきっかけに黄瀬、宮沢賢治、高橋新吉、土方定一、尾形龜之助、そして高村光太郎との交友、そして詩人としての活躍の場を広げていく。昭和3年には、初の活版印刷で、蛙を主題にした詩集『第百階級』を刊行した。その後も蛙をはじめとした動物、天、富士山、鉱物などを主題に生涯で千四百篇余の詩を作っている。

いわき市立草野心平記念文学館は、心平の没後10年余を経た平成10年（1989）年、故郷の山腹に開館した。彼の生涯と作品を紹介する常設展示室をはじめ、文学者や絵本作家などを取り上げて展示会を開催する企画展示室、心平著作を開架し、詩作もできる文学プラザなどからなり、アトリウムロビーのガラスからは幼少期を育んだ雄大な阿武隈山系を一望することができる。

開館に先立ち、心平の親族より自筆原稿、書簡、雑誌、書籍、遺愛品などの関連資料を受贈し、鷗外の後妻との長女茉莉差出の心平宛書簡も何通か所蔵している。

最も早い昭和39年1月8日消印の封書には、前年6月1日付の便箋も同封され、神奈川県鎌倉市の東慶寺で心平と同居したことにふれている。これは、第3回回村俊子賞授賞式の折だろう。茉莉は前年の同賞受賞者ということで出席したのかもしれない。ちなみに心平の日記によれば、昭和37年4月5日に佐多稲子、阿部知二、立野信之、湯浅芳子、草野（武田泰淳次席）らによる同賞選考委員会があり、「森茉莉の『恋人たちの森』に決定」した。同16日には「朝九時半国立発、鎌倉へ。東慶寺での第二回回村俊子賞授賞式にゆく。（森茉莉さんの恋人たちの森）湯浅、佐多、立野、武田、小生の委員たち」と記されている。

心平の日記は、昭和15年から晩年にかけての45年間、原稿用紙に換算して約一万三千枚分が記され、『草野心平日記』全7巻（平成16、18年思潮社）として刊行された。その日の出来事、感想、詩の草稿、スケッチ、来客、食事の献立、さ

らには酒量などとともに、その広範な交友関係をたどる一端にもなっていて、茉莉の名も30回程見られる。

茉莉の名が見られる最後の日記は昭和58年11月25日、歴程賞授賞式のこと。「森茉莉の席に行く。彼女たきつくやうに、どうして返事下らない？という。チンパンカンパン」とあるのは、同年10月24日付で茉莉が差し出した封書についてだろうか。当館所蔵で、同21日に心平が文化功労者になったことへの祝意を伝えている。

日記は続き、「中村屋での二次会にゆく。ジョニウオーカーの水割でやっとな元気づく。但し食べものは一切とらず。七、八十人集って盛会。⑩スピーチなく時間たつ。そこで自分、スピーチ代りに歴程の歌を歌ふ。途中から山本太郎と一緒に。⑪セキに戻ると、隣の森茉莉なんとか言ふ。歌へと言ふとイタリヤの歌を唱ふ。自分マイクをもつてやる。こん度はボクがマルセイエーズ、すると彼女はなんか別のフランス語の歌、こん度はボクが中国語の漁夫の歌、すると彼女はまた別の歌、それからボクの「last night...」。と誰かが日本語の歌を歌えといふ。そこで会津バンドイ山はおらがとつさの山よ...を歌ふ」と、賑やかな宴だったようだ。

茉莉と心平は同じ年に生まれ、茉莉は昭和62年、心平はその翌年に生涯を終えたが、それぞれ自筆の書簡や日記には二人の気の置けない交友が思っている。文学資料の魅力と言えるだろう。そして、このような資料をきっかけにして、記念館同士のさらなる連携を図りたいと考えている。



いわき市立草野心平記念館

福島県いわき市小川町高萩字下夕道1番地の39
TEL: 0246-83-0005

開館時間 ● 9:00 ~ 17:00 (最終入館16:30)
休館日 ● 毎週月曜日 (祝日の場合は開館し、翌日休館)、
年末年始 (12月29日~1月1日)
入館料 ● 小・中学生 160円、高校生・学生 320円、
一般 430円 (2019年10月より変更)

展示報告

コレクション展 「文学とビール——鷗外と味わう麦酒の話」

会期：2019年7月5日(金)～10月6日(日)

本展は、現代の私たちにとって馴染み深いお酒であるビールを切り口に、鷗外とビールの接点と、ビールが描かれた文学作品とを2部構成で紹介しました。

鷗外が最もビールを飲んでいたのは、ドイツに留学していた明治17年から同21年の期間と推察できます。鷗外は、明治18年6月27日の『独逸日記』で、ドイツではビールを12リットル以上飲む者も稀ではなかったこととに触れ、「其量驚く可」と記しました。この記述以降、『独逸日記』には「麦酒」がたびたび登場します。衛生学者ベッテンコッファーのもと自らも被験者となって「ビールの利尿作用」について研究、ザクセン軍団の軍医監ロートからビールジョッキを贈られたこともありました。『鷗外とビール』のコーナーではこれら研究論文やビールジョッキのほか、ミュンヘンのビアホール・ホフプロイハウス訪問の様子が記された書籍や、父・静男からの飲みすぎに注意するよう書かれた書簡などを展覧しました。ビールを通じた鷗外の交友を確認することができました。

『文学とビール』のコーナーでは、ビールが印象的に描かれた作品を選び、日本におけるビール普及の歴史を紹介する大パネルと共に展覧しました。明治23年に発表され

た、鷗外の小説『うたかたの記』では、ミュンヘンのカフェで美術学生が樽から注いだばかりの生ビールを楽しんでる様子が描かれました。瓶ビールが主流だった日本の読者には、新鮮なものだったに違いありません。その他、夏目漱石『吾輩は猫である』（明治39）40年のようにビールが物語に大きく影響を及ぼしたのもや、高村光太郎『カフエ、ライオンにて』（大正2年）や坂口安吾『机と布団と女』（昭和23年）のように現在も営業している酒場の風景を描いたものなど、明治・大正・昭和に書かれた作品を紹介しました。時代を追って、ビールが徐々に生活に馴染んでいく様子を見ることができました。

現代の私たちにとって、これら近代文学作品に描かれた風景は過去のものであり、明治期の読者が感じていたであろう新鮮さを、同じように享受することはできません。しかし、ビール普及の歴史を踏まえて文学作品を読むことで、『うたかたの記』の西洋の雰囲気や、正岡子規が『病牀六尺』（明治35年）に当時流行していた恵比寿ビアホールを「一寸見たい」と書いたときの心境に、共感することができるように思われました。

左記の通り関連事業を開催しました。
○学生ギャラリートーク
日時：9月1日(日) 11時～14時
○講演会「森鷗外とドイツ・ビール」
日時：9月7日(土) 14時～15時30分
講師：美留町義雄氏（大東文化大学教授）

活動報告

鷗外記念講演会

「わたしの森鷗外—医学と文学」開催

毎年恒例の鷗外記念講演会。今年は7月14日に開催し、卒寿を迎えられた当館名誉館長の加賀乙彦氏にお話いただきました。定員を超える参加者が、熱心に加賀氏のお話を耳を傾けました。加賀氏は、鷗外と同じように「医学」と「文学」の両方に足を置き、過ごしてこられました。お話では、功績のあった鷗外の医学研究（ビールの利尿作用、ベルリンの下水道についての研究など）から、鷗外文学に影響を受けたご自身の文学に話題がおよび、充実した90分の講演となりました。参加者からは「知らなかった鷗外の医学者としての面を知ることができました」「加賀先生の探究心に満ちたお話に感動しました」など、多くの声をいただきました。



新・観潮楼歌会

講談一龍齋貞橋独演会 満員御礼!

新・観潮楼歌会では、日本の話芸に関するイベントも開催しています。昨年度の落語に続き、今年度は講談を開催しました。貞橋氏は、人間国宝一龍齋貞水門下で、36年ぶりの男性真打として活躍中です。夜間開館日でもあった開催日の8月3日は、19時から2時間弱にわたって、「応挙の幽霊画」と鷗外作品を基にした新作「護持院原の敵討」を披露。鷗外の小説を講談として聞く機

会となり、会場からも大きな拍手や笑いが飛び交いました。また、あまり講談になじみのない方へ向けて、落語と講談の相違点を交えたお話もありました。終演後のモリキネカフェでは、閉館までの間冷えたビールを楽しむ参加者でにぎわい、夏のひとときをお過ごしいただきました。



文の京ワークショップ

夏休み読書感想文教室 開催

夏休み恒例の「文の京ワークショップ 夏休み読書感想文教室」を、8月4日、18日の2日間にわたり開催しました。今回は、鷗外作品のなかから『最後の一句』を事前に読んで参加いただきました。講座では、全員で順番に音読しながら、3色のふせんを使い分けて「感動した部分」「疑問に思った部分」「登場人物と考え方が違う部分」に印しをつけ、実際に文章を組み立てていくと、きのために整理していききました。同じ作品を読んで、参加者によってスポットを当てた箇所はまったく異なりました。それぞれが取り上げた箇所を発表し合い、楽しげな雰囲気で見聞交換を行いました。今回の講座は読書感想文の書き方でしたが、他の文章を作成する時にも使える方法が満載でした。



大パネルを壁付ケース内に設置し文学作品を時系列に展覧することで、パネルの掲載内容と展示資料との関連性を高めた。



展示のお知らせ

特別展

荷風生誕140年・没後60年記念 永井荷風と鷗外

永井荷風は、明治12(1879)年に東京市小石川区(現・文京区春日)に生まれました。森鷗外を文学上の師と仰ぎ、昭和34(1959)年に亡くなるまで尊敬し続けました。鷗外もまた、自分より17歳若い荷風の實力を認め、明治43(1910)年には慶應義塾大学文学部の教授に推薦し、荷風が主宰する雑誌『三田文学』の刊行を後押ししました。文豪として知られる二人の、こうした接点や交流にもう一度照明を当てたいと思います。

本展では、明治36(1903)年1月の荷風と鷗外の初対面から、荷風の海外体験、「三田文学」での二人の共演、そして鷗外没後に荷風が鷗外作品を再読する時代、さらに晩年にかけて荷風が追った鷗外の面影を紹介します。

「文学者にならうと思つたら大学などに入る必要はない。鷗外全集と辞書の言海とを毎日時間を決めて三四年繰返して読めばいゝと思つて居ります。」(『荷風全集を読む』、昭和11年)

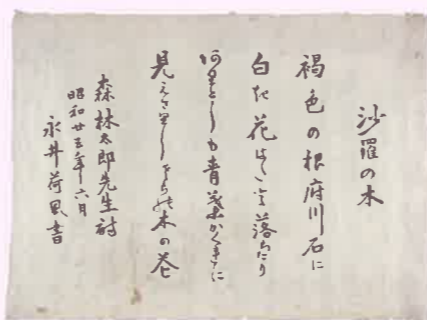
明治、大正、昭和と生涯繰り返し読み返した荷風。死の床には、数冊の本とともに鷗外の『渡江抽斎』が開かれていました。荷風の鷗外敬慕の念は、昭和37(1962)年の当館の前身である文京区立鷗外記念本郷図書館開館へと受け継がれました。荷風生誕140年・没後60年の記念年に、鷗外を敬愛した荷風を追います。

荷風愛用の傘と下駄 永井壮一郎蔵
傘は杖代わりとしても使用したという。
【期間限定公開 11月11日～1月13日】

雑誌『三田文学』 明治43年5月刊
荷風が主宰した雑誌。
荷風も鷗外も多数の作品を寄せた。



荷風筆鷗外宛絵葉書 明治41年11月22日消印
帰朝後、鷗外を訪ねた際の礼状。



荷風書『沙羅の木』碑文原稿 昭和25年6月
鷗外33回忌(昭和29年)に際して、鷗外の長男・於菟に頼まれて揮毫した。

会期 ● 10月12日(土) — 2020年1月13日(月・祝)

【会期中の休館日】

11月26日(火)、12月24日(火)、
12月29日(日)・2020年1月3日(金)

会場 ● 文京区立森鷗外記念館 展示室1、2

開館時間 ● 10時～18時(最終入館は17時30分)

観覧料 ● 一般500円(20名以上の団体…400円)

※中学生以下無料、障害者手帳ご提示の方と介護者1名まで無料
※文京区立森鷗外記念館、パンフレット押印入、友の会会員証ご提示で割引
※市川市文学ミュージアム企画展「永井荷風と谷崎潤一郎展」会期中(11月2日～1月19日)同展の観覧券(半券可)ご提示で2割引き
※その他各種割引がございます。詳細は記念館HPをご確認ください。

監修 ● 中島国彦
協力 ● 永井壮一郎、川島幸希/市川市文学ミュージアム、公益財団法人日本近代文学館、さいたま文学館、東京都江戸東京博物館、文京ふるさと歴史館

関連事業のお知らせ

展覧会期間中に関連講演会を予定しております。事前申込制、定員50名です。申込方法は7頁をご覧ください。

「鷗外と荷風をつなぐもの」

講師 中島国彦氏(早稲田大学名誉教授)
日時 11月2日(土) 14時～15時30分
申込締切 10月18日(金) 必着

「生涯鷗外を敬愛した荷風」

講師 川本三郎氏(作家、評論家)
日時 12月14日(土) 14時～15時30分
申込締切 11月29日(金) 必着

ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。

10月30日、11月20日、12月11日
いずれも水曜日14時～(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要です)

★新春ギャラリートーク

2020年1月5日(日)14時～(30分程度)
申込不要(展示観覧券が必要です)

地域情報

文京一葉忌

11月23日(土)

小説家・樋口一葉(明治5～29年)は、文京区そして鷗外とゆかりが深い文学者です。幼少期を本郷(現・文京区本郷)で過ごし、14歳で旧小石川区の歌塾・秋の舎に入塾、18歳で再び本郷に戻り、一時転居するものの亡くなるまでこの地に暮らしました。終焉の地となった本郷区丸山福山町の家は、『大つごもり』たけくらべ』に「こりえ」などの代表作が生み出された地でもありました。鷗外が、主宰雑誌『めざまし草』の新作合評「三人冗語」で、「一葉の『たけくらべ』を絶賛したことはよく知られています。一葉が晩年にもっとも交流を持ったのが、『三人冗語』評者の一人であった小説家・斎藤緑雨です。緑雨は、一葉が病床に臥せると、鷗外を介して医学者・青山胤通に診察を依頼するなど、親身に接しました。しかし、診察結果は決して良いものではなく、明治29年11月23日、一葉は24歳の若さで逝去しました。

文京一葉忌は、丸山福山町家の隣に位置する法真寺が主催しており、毎年11月23日に朗読会と講演会が開催されています。一葉ゆかりの地を巡り、鷗外も高く評価した一葉を偲んでみてはいかがでしょうか。

展示会場から

鷗外自筆『盛儀私記』

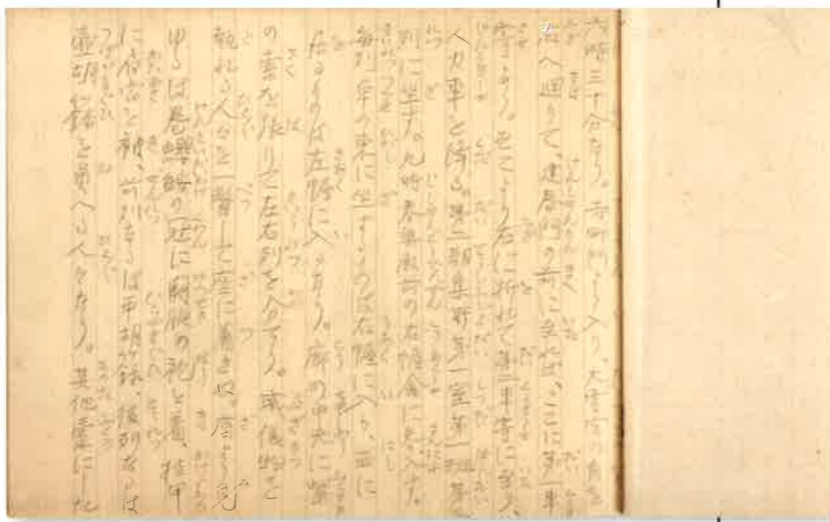
大正4年 [20038]

大正4年11月、大正天皇の即位の大礼が京都御所で執り行われました。当時、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長だった鷗外は、この大礼に出席しています。近代日本初の大礼に際し、たくさん関連書籍が発行され、連日新聞で報道されるなど、多くの人が関心を寄せていました。鷗外は「東京日日新聞」の依頼を受け、11月8日に東京を出発し18日に帰宅するまでの10日間の記録を、『盛儀私記』と題して執筆しました。本作は、11月12日から22日まで、「東京日日新聞」および『大阪毎日新聞』で、それぞれ6、7回に渡り連載されました。当館には、3回目までの自筆原稿を所蔵しています。

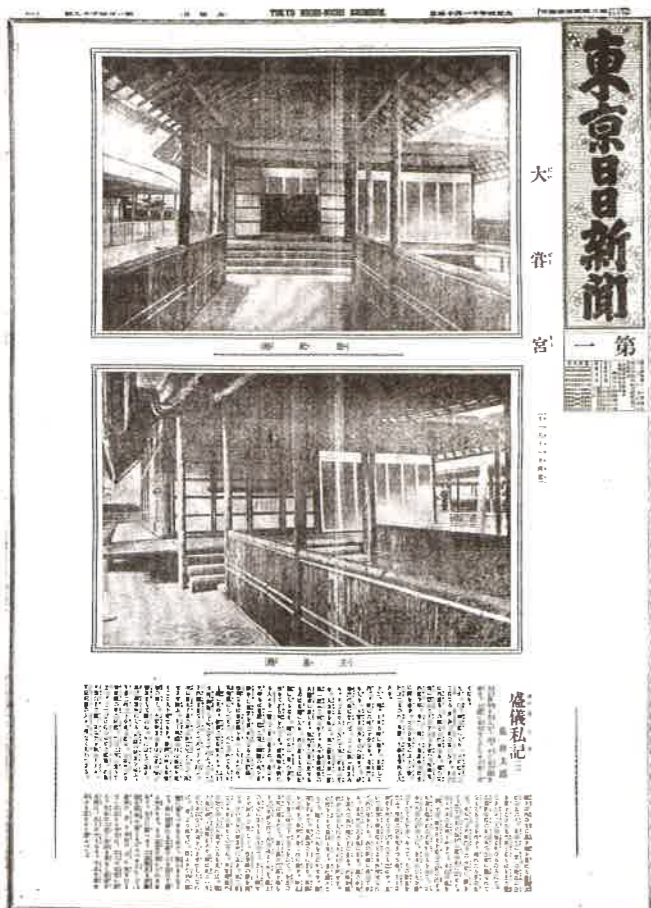
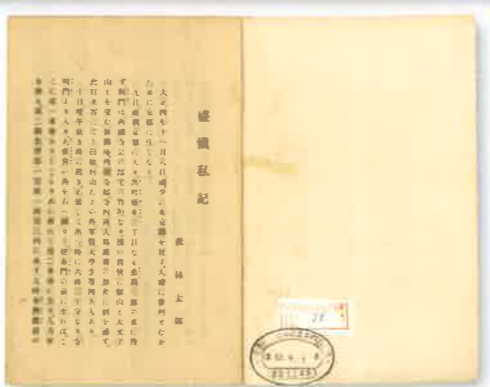
京都滞在中、鷗外は当時京都府立図書館司書を務めていた弟・潤三郎の家に宿泊し、10日の即位式と11日の春興殿前での儀式、14・15日の大嘗祭(即位後初の新嘗祭)、16・17日の大饗(大規模な饗宴)に出席しました。鷗外は、儀式の内容、皇族の服装、祭具、会場となった紫宸殿や大嘗宮の構造、大饗のメニューなどを詳細に記しました。一方で、参加者が見ることができなかった秘儀については「始終見るべき色もなく、聞くべき声もなく」と、率直に書いています。

大礼が行われない日には潤三郎と共に、この度の大礼で贈位を受けた日乗上人や、儒学者・伊藤東涯、山崎闇齋らの墓参りに出かけました。その様子もまた『盛儀私記』に記されました。

鷗外は京都から、妻・志げに本作の掲載紙を保存しておくよう伝え、子ども達には葉書に紫宸殿の略図と、自身が列席した場所を記したものを送りました。『盛儀私記』はのちに私家版として一冊にまとめられ、親戚知人に配布されました。



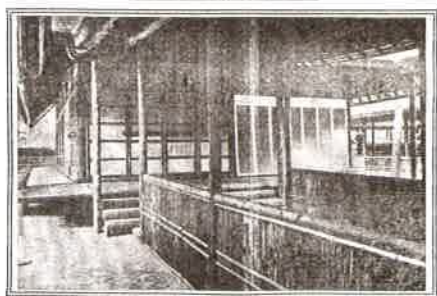
上 『盛儀私記』 大正4年11月10日の項
右 私家版『盛儀私記』(「A」セー)
左 『東京日日新聞』大正4年11月13日
国立国会図書館蔵



東京日日新聞

大正4年

盛儀私記



盛儀私記
大正4年11月10日
東京日日新聞

点から線へ、そして面へ

——『森鷗外宛書簡集2へあーい編』編集を終えて——

須田喜代次（大妻女子大学教授、森鷗外記念会常任理事）

文京区立森鷗外記念館が所蔵する賀古鶴所筆森鷗外宛書簡を収録して、二〇一七年一月同館から刊行された『森鷗外宛書簡集1 賀古鶴所』に続く第二弾として、『森鷗外宛書簡集2へあーい編』が二〇一九年七月刊行された。これは『森鷗外宛書簡集1』と同じく記念館が所蔵する諸家の鷗外宛書簡のうち、発信人名が「あ」と「い」のもの、全三十三人、一四二通を翻刻紹介するものである。書簡自体の翻刻の他に、当該書簡に関する若干の注記、発信人略歴（鷗外との関係に特化して照明を当てるように試みた）を付し、さらに本号編集に携わった小川康子・須田喜代次・松木博・山口徹の四名が翻刻書簡に基づいた「解説」を執筆している。

本書簡集に特徴的なこととして、収録書簡の本文部分（一部書簡は住所面も含む）を全て写真版で収録できたことである。スペースの関係で縮小せざるを得ず、この写真版によって本文の詳細を読み取ることは難しいかも知れないが、それでも葉書類は判読可能なものも少なくないと思われる。——本文内容だけではなく、書かれた文字も発信人の個性を窺わしめて興味深い。石川啄木書簡など生徒が先生に提出する作文の清書のような（まさに啄木にとってはそれが真実であったのだろう）几帳面な文字が並びほほえましくさえある。また絵葉書類は、文字通り「百聞は一見にしかず」であり、絵柄の選択一つにしても、各発信人の受信人・

鷗外に対する思いを汲み取ることができる。この絵葉書を受け取ったとき、鷗外がどのように共感するか、各発信人はそうした思いを込めて、それぞれの絵柄を選んだに違いない。

翻刻作業をしている中では様々な発見に出会えて、それは大きな喜びであった。職業も年齢も鷗外との関係もそれぞれ異なりながら、人と人との関係、そこに築かれるいわば鷗外文化圏とも言うべきものが、発信人名「あ」と「い」という限られた範囲ではあるのだけれども明らかに変わったことが少なくない。もう一つ、自分の無知をさらけ出すようで恥ずかしいのだが、例えば伊藤左千夫が使っている「執事」という脇付は、わたくしは初めて見たし、石黒忠恵書簡に見える「不煩書覆」（覆ラ書スルヲ煩セズ）などという言葉の使い方も初めて知った。明治人の教養、恐るべしである。

本書簡集に続く、記念館が所蔵する発信人名「う」以下の鷗外宛て書簡の翻刻作業も進められており、順次刊行の予定である。そうした作業の上に鷗外文化圏は様々な姿を現してくるに違いない。これまで点としてしか意識されていなかった諸関係が、線として繋がり、全巻揃ったときそれは面として見えてくるのではあるまいか。そのとき鷗外森林太郎像は、新たな一面を見せてくれるはずである。



定価：3,500円(税別) A5変形判 / 168頁
監修：須田喜代次

鷗外宛書簡は、『鷗外全集』(岩波書店 昭和61〜平成2年)に収録されていますが、鷗外宛書簡については、研究論文や展覧会図録に掲載されたものもあるものの、多くは未発表となっています。森鷗外記念館では、知友から鷗外に寄せられた書簡の翻刻を紹介する『文京区立森鷗外記念館所蔵森鷗外宛書簡集』を継続刊行しています。

7月刊行の『森鷗外宛書簡集2へあーい編』は、当館ショップで販売のほか、通信販売にも対応しております。お気軽にお問い合わせください！

○発信人名
響庭賢村 青山風通 秋山謙造 浅倉屋久兵衛 新井章吾 荒木鹿六 伊井孫兵衛 生田斐山 伊藤良 石井柏亭 石川幸吉 石川啄木 石川千代松 石黒忠恵 石坂惟賢 石橋忠孝 石原喜久太郎 石原忠 伊豆凡夫 泉鏡花 磯野於菟介 市川男女蔵 市河三郎 市村重太郎 伊藤左千夫 伊東巳代治 井上門了 井上通孝 伊庭孝 伊藤敏郎 今泉雄作 入澤達吉 藤谷小波

○解説掲載題
松木博「青山風通からの絵葉書の考察」
小川康子「石黒忠恵の天正八年の夏」
山口徹「森鷗外宛書簡の背景をめぐって」
須田喜代次「少女我儘ナル鷗外と、癡癡持通泰との交情」
森鷗外宛書簡上通泰書簡を巡って

これからの催しもの

催しは○以外は全て事前申込制です。各申込締切日必着でお申込みください。詳細は、チラシやHPをご覧ください。当館までお問い合わせください。

★応募多数の場合抽選とさせていただきます。
★悪天候等やむを得ない事情により、日程・講師・内容を変更する場合があります。

10月23日(水) 10:00～16:00 鷗外文学散歩「鎌倉文学散歩～長谷から鎌倉文学館へ」 講師：須田喜代次氏（大妻女子大学教授、森鷗外記念会常任理事） 協力：鎌倉文学館 行程：成就院、御霊神社、長谷寺、甘縄神明神社、鎌倉文学館 定員：25名 料金：6000円(入館料、昼食代、資料代、保険料込) 申込締切：10月10日(木)必着 文学作品に登場する鎌倉、長谷周辺の社寺や、鎌倉文学館を訪ねます。同行の須田氏による講義も行います。	11月2日(土) 14:00～15:30 展示関連講演会「鷗外と荷風をつなぐもの」 講師：中島国彦氏（早稲田大学名誉教授） 会場：講座室 料金：無料 ※要本展観覧券(半券可) 定員：50名 申込締切：10月18日(金)必着	11月24日(日) 14:00～16:00 開館記念日講演会「おくりな 論、元号、即位式——鷗外の嘆き」 講師：山崎一頼氏（跡見学園女子大学名誉教授、森鷗外記念会顧問） 会場：跡見学園中学高校 跡見李子記念講堂（文京区大塚1-5-9） 料金：1000円 定員：200名 申込締切：11月8日(金)必着 晩年、歴代天皇の論や元号の考証に力を注いだ、鷗外の信念に迫ります。	12月14日(土) 14:00～15:30 展示関連講演会「生涯鷗外を敬愛した荷風」 講師：川本三郎氏（作家、評論家） 会場：講座室 料金：無料 ※要本展観覧券(半券可) 定員：50名 申込締切：11月29日(金)必着	12月21日(土) 13:00～14:30 朗読会「永井荷風の『日和下駄』を読む」 朗読：今井朋彦氏（文学座） 作品解説：中島国彦氏（早稲田大学名誉教授） 会場：講座室 料金：2000円 定員：50名 申込締切：12月6日(金)必着	1月11日(土) 14:00～15:30 鷗外誕生日記念講演会「死を生きた人びと」 講師：小堀鷗一郎氏（新座市堀ノ内病院訪問診療医） 会場：講座室 料金：1500円 定員：50名 申込締切：12月27日(金)必着 多くの「看取り」に関わった訪問診療医・小堀鷗一郎氏に、「望ましい死」のあり方について、鷗外の考えも交えてお話いただけます。
--	--	---	--	---	--

10月12日(土)、13日(日) 10:30～15:00 鷗外マルクト「おいしい秋の津和野」◎ 協力：津和野町東京事務所 会場：当館前、エントランス 鷗外の故郷・島根県津和野町から取り寄せた、野菜やお茶、お酒やジャムなどを販売します。	11月1日(金) 10:00～17:30 開館記念日行事◎ 開館記念日に展覧会を観覧いただいた方に、オリジナルポストカードをプレゼント!	11月23日(土・祝) 10:30～12:00 文の京ワークショップ/ふみの日イベント 「ぬり絵でクリスマスカード」 講師：仲築間三幸氏（画家、絵画教室主宰） 会場：講座室 料金：1500円 定員：30名 申込締切：11月8日(金)必着 対象：5歳～大人 持ち物：色鉛筆 講師オリジナルデザインの図案に色鉛筆でぬり絵をし、水彩画のようなクリスマスカードに仕上げます。図案は選べます。	12月7日(土)、8日(日) 10:30～15:00 鷗外マルクト 「ドイツクリスマスマーケット」◎ 会場：当館前、エントランス クリスマスグッズ、ドイツワインやシュトレンなど、ドイツのクリスマスマーケットで定番の品々を販売します。	12月15日(日) 11:00 / 13:30 「クリスマスコンサート」◎ 演奏：MOGカルテット 会場：エントランス 料金：無料	12月23日(月) 11:00～17:00 文の京ワークショップ/ふみの日イベント 「なつかしの年賀状をつくろう!」◎ 会場：エントランス 料金：無料 芋版やあぶりだしなど、懐かしい年賀状をつくりましょう。
--	--	---	--	---	---

◆◆上記イベントの申込方法◆◆

事前申込制のイベントは、各申込締切日までに下記のいずれかの方法でお申込みください。申込みは、1通につき1名様(はがき・Eメールどちらかお一人様1通まで)、応募者多数の場合は抽選とさせていただきます。申込締切後1週間以内に抽選結果をお知らせします。

- ①往復はがき 往信に参加希望プログラム名・日程・氏名(ふりがな)・住所・電話番号、返信用には、住所・氏名を明記の上、〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 文京区立森鷗外記念館イベント係までご応募ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号をご記入ください。
- ②Eメール 件名に参加希望プログラム名・日程・本文に氏名(ふりがな)・Eメールアドレス・電話番号を明記の上、bmk-event@moriogai-kinenkan.jp までご応募ください。 ※参加可否のご連絡をEメールで行います。当館からのEメールが受信可能なEメールアドレスをご記入ください。受信制限が設定されている場合、当館からのEメールを受け取れないことがありますので、あらかじめご確認のうえ送信ください。 ※日中に連絡が取れる電話番号もしくはEメールアドレスをご記入ください。

[ご提供いただきました個人情報は、個人情報保護法に基づき適切に管理し、当該プログラム以外の使用はいたしません。]



ショップ便り



カフェ便り

コレクション展「文学とビール」の展示に合わせてモリキネビールをカフェで販売しています。花の酵母を使ったビールは仄かに草花が香る爽やかな味わいで、白と緑を基調にしたビールラベルの印象にもぴったりの夏に似合うビールです。



モリキネビール 800円

次回特別展「永井荷風と鷗外」では、期間中展示にちなんだ限定メニューが登場します。食にこだわりのあった永井荷風の食卓から、荷風が好んで食べていた朝食、クロワッサンとシヨコラ(ココア)のセットを販売します。

カフェで提供しているモリキネプレート
のドイツパンが、これまではプレッツェルのみでしたが、2種類のドイツパンを加えて3種類から選べるようになりました。柔らかなほんのりした甘み特徴の三角パンと、ドイツパンではお馴染みの少し酸味がある黒パン・シユバルツプロットをご用意しています。それぞれ違った個性をお楽しみいただけます。



モリキネプレートは3種類のパンを選べます 550円

ボランティア活動ノート

当館の展示ガイドボランティアによるガイドツアーは、土日祝日の13時から15時からの計2回実施されています。当館でガイドツアーが実施されていることをご存じで時間に合わせて来館くださる方や、初めてのご来館でどこからどう展示を観覧したらよいのか分からない方にもとても好評です。13時、15時になりましたらエントランスにお集まりください。



この夏、展示ガイドボランティアが、ガイドツアーをすするときに着用するベストとジャンパーを作成しました。オレンジ色に当館の紺色のロゴが入っています。館外・館内展示室、どこにいても分かりやすい色を選びました。ガイドツアーの最初から参加されなくても、展示室でツアーと遭遇したら、どうぞ遠慮なく加わってご参加ください。
また、今秋新たに4名の展示ガイドボランティアが加わる予定です。ただ今先輩ガイドに付いているいろいろなことを学んでいます。デビューをお楽しみに!

2019年度後期 文京区立森鷗外記念館 開館カレンダー

10月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

11月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

12月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

1月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

3月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

コレクション展「文学とビール— 鷗外と味わう麦酒の話」
7月5日(金)～10月6日(日)

特別展「荷風生誕140年・没後60年記念 永井荷風と鷗外」
10月12日(土)～2020年1月13日(月・祝)

コレクション展「父と母」(仮称)
2020年1月18日(土)～3月31日(火)予定

● 休館日

編集後記

森鷗外記念館では、2017年度よりコレクション展毎に「ミニ展示ガイド」を刊行しています。解説、パネル、資料キャプション、年譜などを掲載するもので、値段も2000円代と大変お買い得な商品です。

展覧会終了後も、売り切れの場合を除き、当館ショップで継続販売しています。2018年度開催のコレクション展「少しも退屈と云ことを知らず 鷗外、小倉に暮らす」では、巻末に鷗外自筆『小倉日記附録一』の図版24枚を掲載。『鷗外全集』に収録されていない貴重な資料です。また、開催中の展覧会「文学とビール」では、好評につき増刷を行いました！「ミニ展示ガイド」は、お土産としてだけでなく、展覧会を振り返っていただくのに最適なアイテムです。

販売状況は当館ウェブサイトのショップページでご確認いただけます。ご希望の方には、通信販売も行っていますので、お気軽にお問い合わせください！



●電車をご利用の場合

- ・東京メトロ千代田線「千駄木」駅 1番出口 徒歩5分
- ・東京メトロ南北線「本駒込」駅 1番出口 徒歩10分
- ・都営三田線「白山」駅 A3番出口 徒歩15分
- ・JR山手線・京成線「日暮里」駅 南口 徒歩15分

●バスをご利用の場合

- ・都バス 草63番系統「千駄木一丁目」下車 徒歩1分
 - ・都バス 上58番系統「団子坂下」下車 徒歩5分
 - ・B-ぐる千駄木・駒込ルート「18特養ホーム千駄木の郷」下車 徒歩5分
- ※一般の駐車場がございませんので、公共交通機関をご利用ください

〒113-0022 東京都文京区千駄木1-23-4 TEL: 03-3824-5511
URL: <https://moriogai-kinenkan.jp>

開館時間 10:00～18:00 (最終入館は17:30)

休館日 毎月第4次曜日(祝日の場合は開館、その他例外あり)、
年末年始(12月29日～1月3日)、及び展示替期間、煙蒸期間等

文京区立
森鷗外記念館
Mori Ogai Memorial Museum